寺島浩子著

明治三〇年代生まれ話者による

町家の京言葉

付　近世後期上方語の待遇表現

武蔵野書院

目　次

まえがき ……8

第一部

第一章　「京言葉」記述の方法 ……9

(一)　京言葉記述の方法 ……9

(二)　京言葉の性格 ……10

(三)　京言葉の話し手 ……11

(四)　調査日時・調査法 ……13

第二章　方言の「待遇表現」の体系的記述の方法 ……18

第三章　京言葉における「人称代名詞」 ……53

はじめに ……53

(一)　京言葉における人称代名詞の特色 ……54

(二)　京言葉における人称代名詞の記述 ……56

第二部

第一章　京言葉における「あいさつ表現」……69

はじめに……69

(一)　京言葉における家庭内のあいさつ表現……70

(二)　京言葉における他家訪問の際のあいさつ表現……77

(三)　京言葉における他処での出会いの際のあいさつ表現……99

(四)　京言葉におけるあいさつ表現の特色……101

第三部

第一章　京都町家の人間関係に関わる京言葉……105

(一)　京都町家の人間関係……105

(二)　京都町家の家族関係に関わる京言葉……107

(三)　京都町家の雇用関係に関わる京言葉……125

第四部

第一章　京言葉における「親族語彙」……131

(一)　親族・親族語彙の範囲……131

(二) 親族語彙の分類 …… 134
(三) 親族名称の虚構的用法 …… 142
(四) 京言葉の親族語彙の特質 …… 147

第五部

第一章　京言葉における「幼児語」 …… 153
はじめに …… 153
(一) 京言葉における幼児語の定義と性格 …… 154
(二) 京言葉における幼児語の記述 …… 155
(三) 京言葉における幼児語の特色 …… 168

第二章　京都町家の子供たち …… 171
――関連語彙からみる――
はじめに …… 171
(一) おもちゃの名前 …… 173
(二) 遊びの名前 …… 177
(三) おやつの名前 …… 182

(四) 唄と言い伝え ……190

第六部

第一章　京言葉における「性向語彙」 ……194

はじめに ……194

(一) 「方言性向語彙」の定義と特色 ……195

(二) 方言性向語彙の類別 ……198

(三) 京言葉における性向語彙「ヒト型」の連語 ……203

(四) 京言葉における性向語彙マイナス評価 ……217

(五) 京言葉における性向語彙プラス評価 ……245

(六) 分類表から見る京言葉における性向語彙の性格 ……256

資料　京言葉における性向語彙一覧（A表） ……263

第七部

第一章　近世後期上方語の待遇表現 ……309

――命令表現を中心に――

はじめに ……309

(一) 待遇表現の定義と論の方向性 ……311

(二) 上方に特有の、動詞を中心とするある待遇表現のあり方 …… 316
(三) 命令表現 …… 318
まとめ …… 333
第二章　近世後期上方語の待遇表現 …… 342
――「命令表現」（勧誘・禁止表現）――
はじめに …… 342
(一) 命令表現の分類と論の方向性 …… 343
(二) 勧誘表現 …… 347
(三) 禁止表現 …… 350
まとめ …… 366
第三章　近世後期上方語の待遇表現 …… 368
――人称代名詞について――
はじめに …… 368
(一) 待遇表現における人称代名詞の位置と論の方向性 …… 369
(二) 一人称・二人称代名詞と人間関係 …… 369
(三) 三人称代名詞 …… 374

(四) 不定称代名詞 …… 381
まとめ …… 386
第四章　近世後期上方語の待遇表現 …… 389
――動詞に関わる上方特有の表現法――
はじめに …… 389
(一) 人称代名詞 …… 390
(二) 動詞に関わる、上方特有の待遇表現法 …… 393
まとめ …… 398
あとがき …… 401

明治三〇年代生まれ話者による

町家の京言葉

付　近世後期上方語の待遇表現

まえがき

筆者は、主に近世後期上方語と京言葉とに関する拙稿を発表してきた。そのうちの京言葉に関するものを中心に、本にまとめることとした。

京言葉に関しては、各テーマのもと、既発表の拙稿を手直ししたものと、ほぼ書きおろしと言える性向語彙に関する拙稿一本とを収めた。近世後期上方語の待遇表現に関しては、拙稿四本を収めた。この四本の拙稿は、今回少しの例外は別として、既発表のままの記述とした。符号などの不統一は、あえてそのままにした場合がある。

近世後期の上方語と江戸語との比較を通し、上方語に特有の軽い敬意の表現が発達していることと間接表現に定型化が見られることとを指摘している。京言葉に、この特質が受け継がれているということが、筆者の主張である。

そのため近世後期上方語に関わる論考を第七部で取り上げる。

本書の記述に関わりの深い既発表の拙稿については、補註に記す。

第一部

第一章　「京言葉」記述の方法

(一)　京言葉記述の方法

近世の中頃文化の中心が上方から江戸へ移った(文運東漸)ため、「近世後期上方語」は、資料に恵まれない。そのため、前期の上方語や後期の江戸語に較べ、あまり論及されずにきた。筆者は、近世前期上方語をうけて明治以降の京阪語へと伝えていく上方語の流れを見る上で、近世後期上方語の考察が重要であると考える。ところが、先にも述べたように資料には数に限りがあり、又、位相的にも片寄りが見られる。(註一)そこで、資料上の欠点を補い上方語の特色を明らかにしていく一つの方法として、江戸語と比較する方法を採ってきた。いま一つの方法として、現代京阪語の特色を捉え流れを遡っていく方法を加えたい。現存する人を協力者として豊富なデータを得ることができる点が、現代京阪語を考察する際の最大の長所である。

江戸語と対比する時一まとまりに特色を捉えることのできた上方語、そしてその流れを汲む京阪語ではあるが、内部的に見ると、京都の言葉と大阪の言葉は、文化の違いを反映して質の違いを見せる。全体系として見る場合には、

京阪語という捉え方は大きすぎる。

そこで、記述の対象を、まず、筆者の出生・在住の地京都の言葉に限定する。京都人に特有の言語感覚が存すると考え、記述の中心を「京言葉」におくこととする。調査により、明治三〇年代生まれの話者の京言葉の体系全体を明らかにしていきたい。

「京言葉」の記述を試みるにあたって、その目的を次に記す。

① 近世後期から現代への京都語の流れを捉える方向へ、論を発展させるため。

② 後のための記録として、生存者を被調査者とする体系的記述を残しておくため。

(二) 京言葉の性格

「京言葉」という名称は、「京都方言」あるいは「京都弁」という名称とは意味あいを異にする。地域的な名称の「京都方言」に対して、「京言葉」はよく「優美(註一)」と形容される等、質に関わる名称であると言える。そのため、誰が、どのような場で話す言葉か、特定しにくい。そして、京言葉を京言葉たらしめている〝質〟を明らかにしていかなければ、実態を掴めないという難しさが存する。

京言葉の性格づけの詳細について後考を期すが、筆者は、京言葉のはじまりを中世あたりと考えている。林屋辰三郎氏の『京都』(岩波新書・一九六二年)に、「京」に関する次の記述が見える。(P. 98)。

古代末期には、京都も『平安京』のよそよそしい政治の都から、単なる『京』として親しみやすい商業の町へうつる気配が現われはじめていた。

この〝親しみやすい商業の町〟としての「京」で育まれた言葉が、「京言葉」であると捉えたい。京言葉の話し手に関しては、次に述べることとする。

(三)　京言葉の話し手

京都の言葉を内部的に見て、従来、次のような区分がなされている。

○　楳垣実氏『京言葉』（高桐書院・一九四六年）における区分（P. 33）

公家詞（公家・華族及びその関係社会）
商家詞（中京の問屋街に行われる）
職人詞（西陣の織屋街を中心とする）
花街詞（祇園を中心とした茶屋町詞）
農家詞（八瀬・大原辺の特殊な方言）

○　井之口有一氏　堀井令以知氏『分類京都語辞典』（東京堂出版　一九七九年）における区分（P. 186）

町方のことば
- 中京（なかぎょう）のことば（中京区を中心とすることば。主として室町の問屋街のことばなど）
- 西陣の職人ことば（西陣機屋街に行われる職人のことば）
- 祇園の花街ことば（祇園を中心とした花街ことば）
- 伝統産業語（京焼・友禅染・京扇子などの職業語）
- （付）八瀬・大原などの農家ことば（京都周辺の八瀬・大原・北白川・高雄・桂・大枝などの農家ことば）

御所ことば
- （宮中・宮家・尼門跡、さらに旧公家に行われたことば）

京都の言葉は、このような区分にも見られるように、内部的に、多様である。話し手も、当然多様である。

ところが、「京言葉」という名称が用いられる場合には、話し手をごく一部の人々に限ろうとする傾向が強い。現在、京言葉の話し手を、祇園の花街の人々あるいは室町の問屋街の人々に限定する発言を、よく耳にする。

京都においては、地域と職業との結びつきが強く、先の区分表に見られるように、ほぼ地域ごとに言語特徴を示す。そのため、先のような限定を京言葉の話し手に求めることは、京言葉をある種の職業語として捉えることになる。したがってある地域の職業的な言語特徴が、京言葉を京言葉たらしめる中心のものであるということになる。

この、話し手をごく一部の人々に限ってしまう考え方に、従うか否か。―筆者の生活経験からすれば、京都の内部的言語差は案外小さく、「御所ことば」[註三]を別にして、日常言語の相当大きい部分が各区分の言語に共通であると考えられる。そのため、「町家のことば」[註四]の標準形のようなものを考えて、その上に、各区分における職業的な言語特徴を検討していくという方向をとりたい。

以上から、筆者は、京言葉の話し手を町家の人々に求め、町家の人々の言葉を対象として、今後の調査と論とを進めていくこととする。体系全体の把握を目指す。

勿論、京都の町家の言葉と京言葉とを、まったく同一のものとは考えていない。先にも述べたように、「京言葉」という名称は、価値づけの意識の加わった観念的な呼称である。町家の人々の言葉の体系的記述を試みるなかで、京言葉の特性を明らかにしていきたいと考えている。

町家の人々の言葉のうちの、たとえば卑罵表現など、下品な言葉は検討を要するが、そのままに記録しておく。

以上、京言葉の話し手を町家の人々とすることについて、述べた。

(四)　調査日時・調査法

まず、被調査者についてであるが、京都の言葉が日々様変わりしていることを考慮に入れて、出来るだけ高齢の方にお願いする方針のもとに、次の方々のご協力を得た。（敬称略）

(A)　男性　草葉孝次　明治三〇年四月二日（東山区大和大路通五条下ル二丁目）生

校区　修道小学校
家庭環境　父は漢文の教員
最終学歴　京都師範
職歴　大学事務・教員歴あり

(B)　女性　鈴木敏子　明治三二年六月一九日（上京区岡広道通丸太町上ル）生

校区　第三錦林小学校
家庭環境　御所侍の家系
最終学歴　京都府立京都第一高等女学校（府一）
国語漢文専攻科三年
職歴　五～六年教員歴あり

(C)　女性　小田輝子　明治三五年一〇月一七日（中京区新町通二条下ル）生

校区　龍池小学校
家庭環境　父は通い別家（暖簾わけの後も店を構えず、本家に通って仕事をする人）
最終学歴　京都市立女学校（堀川）
職歴　主婦

（D）女性　草葉松栄　明治三九年一〇月一日（東山区祇園下河原通金園町四丁目）生
校区　安井小学校
家庭環境　父は薬局を経営し、母は助産婦（産婆）
最終学歴　京都府立京都第一高等女学校（府一）
職歴　主婦

［補註］
＊　被調査者は、出生年の順に記した。（A）と（D）は夫婦。

＊　東山区　昭和四年上京区から分区、成立。
中京区　昭和四年上京区の南部と下京区の北部を分割して成立。
上京区　下京区とともに京都で最も古い行政区。

［説明］

＊　校区は、被調査者の区別意識が強く、特に一覧に入れた。

＊　この四人を選んだ理由

この四人はある程度、知的な人達であり、方言話者としてふさわしくないのではないのかという指摘を受けたことがある。京言葉の体系化が論の目的である。京都の言葉に強い愛着をもち、多くの語に出会い内省的にその質を考える協力者として、むしろ積極的に、好ましい被調査者だと考えている。他にも、別の被調査者に対する調査を行ったことがある。かけた時間と内容とからこの四人の調査結果に絞り、論述する手法をとることとした。全員が明治三〇年代生まれである。

＊　データは次の二点を大切なものとした。

・話者の限定→中流程度の人達である。

・データの多寡。

＊　他府県の語との関係

他府県の方言に筆者が「京言葉」としている語と同形のものが当然ありうる。語の普及の歴史などの要因があろう。他府県に同形の語があっても、そのことを特に取り上げない。すなわちその語が他地域にもあるから京言葉としないという考え方は採らない。

調査の方法としては、「自然観察法（自然傍受法）」と「人為的観察法」とを併用する。

①　「自然観察法」として

被調査者同士の自然談話をテープに収録し、別に、メモをとる。

②「人為的観察法」として

質問事項を用意し、口頭で質問する。そして、被調査者から口頭で得た答えをメモする。同時に、この応答をテープに収録する。

①と②において、単語の収録に留まらず、あいさつの表現など一文または二文にわたるものや、わらべ歌・唱え言葉なども収録するようにした。

先に記した被調査者のうちの二～四人と、調査者である筆者とが同席し、一回の調査につき二～四時間を要して、談話を進めるという形をとった。その際に、①②の観察法を併せおこなった。

現時点までの調査日時を次に記す。○内に第何回目の調査であるかを数字で示す。そのあとに、月・日の順に数字を記す。調査は、一九八一年二月六日～一九八五年七月五日のあしかけ五年の間に八九回おこなった。これはテープに残した日時であり、実際は、あと何回かの訪問調査をおこなっている。

一九八一年

①2・6　②2・11　③2・17　④2・24　⑤3・3　⑥4・3　⑦4・7　⑧4・17　⑨4・24　⑩5・29　⑪6・12　⑫6・19　⑬7・3　⑭7・10　⑮7・23　⑯7・28　⑰8・6　⑱8・26　⑲8・28　⑳9・5　㉑9・11　㉒10・9　㉓10・20　㉔10・30　㉕11・13

一九八二年

㉖6・25　㉗7・23　㉘8・4　㉙9・17　㉚9・24　㉛10・1　㉜10・8　㉝10・29　㉞11・5　㉟11・19

㊱11・26　㊲12・3　㊳12・7　㊴12・17　㊵12・24

一九八三年

㊶2・18　㊷2・25　㊸2・28　㊹4・1　㊺4・22　㊻4・28　㊼5・9　㊽5・13　㊾11・18　㊿11・30

(51)12・4　(52)12・9　(53)12・14　(54)12・22

一九八四年

(55)1・20　(56)2・2　(57)2・24　(58)2・26　(59)3・2　(60)3・9　(61)3・16　(62)4・20　(63)5・4　(64)5・11　(65)5・25　(66)6・1　(67)6・8　(68)6・15　(69)6・22　(70)6・27　(71)7・6　(72)7・20　(73)7・26　(74)8・6　(75)11・15　(76)11・22　(77)11・28　(78)12・7　(79)12・21

一九八五年

(80)4・19　(81)4・25　(82)5・4　(83)5・9　(84)5・17　(85)5・22　(86)6・6　(87)6・12　(88)6・21　(89)7・5

この調査を元に、テーマ別に、京言葉について考えていく。

「註」を減らしてできるだけ本文で説明することとする。

第二章　方言の「待遇表現」の体系的記述の方法

「待遇表現」を、話し手の人間関係に対する意識（上下認定・親疎認定・尊卑感情・親疎感情）が言語表現の上に現れたものと規定する。

待遇表現は、語彙・文法・修辞・音声等に、広く関わりをもつ。京言葉の待遇表現の体系的記述を目指すにあたって、藤原与一氏『方言敬語法の研究』巻一（春陽堂・一九七八年）の記述を参考にしたい。氏は、「待遇表現法の記述の体系」として、次の項目を挙げている。

Ⅰ　いわゆる尊敬法に関する記述
Ⅰ′　尊敬法外形の「ていねい表現法」の記述
Ⅱ　いわゆる謙譲法に関する記述
Ⅱ′　謙譲法外形の「ていねい表現法」の記述
Ⅲ　丁寧法に関する記述
Ⅳ　文末詞に関する記述
Ⅴ　間投詞に関する記述
Ⅵ　格助詞に関する記述
Ⅶ　人代名詞に関する記述

Ⅷ　接辞に関する記述
Ⅸ　語えらびに関する記述
Ⅹ　言いまわしに関する記述
Ⅺ　呼びかけ・応答などの慣用の言いかたや、特殊のあいさつことばに関する記述
Ⅻ　特殊連文に関する記述
XIII　文末の声調に関する記述
XIV　文表現面上の（文表現音声上の）特殊音調に関する記述
XV　個々の表現音声に関する記述
XVI　卑罵・尊大など、「非ていねいな表現法」に関する記述

（Ⅰ・Ⅱは、用例が少なく、ここでは触れない。Ⅻは正確を期して、ここでは、詳しく触れない）

以下、藤原氏の記述の体系に学び、京言葉の待遇表現の記述を考えていく。音調に関する記述の充実は、今後の課題とする。

範囲を拡大し人を表す表現の一環として、親族名称その他について第四部で取り上げることとした。Ⅺについては、二部において詳述する。

Ⅰ　いわゆる尊敬法に関する記述

(1)　尊敬法動詞による尊敬表現法

以下、共通語と同形のもの（即共通語、ではない）をまず、■の中に示し、その後方言形とでも呼ぶべきものを個別に取り上げていく形をとる。

アガル（メシアガル）・イラッシャル・オッシャル・クダサル・ナサル　その他

補助動詞として

オ（ゴ）…クダサル・オ（ゴ）…ナサル・オ（ゴ）…ニナル・（テ）イラッシャル・（テ）クダサル

オイデル

男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
オイデ	オイデ	オイデル	オイデル	オ△イデレ	オイデ

（仮定の意では、「オイデタラ」が一般的）

「イラッシャル」「オイデヤス」の方が敬意が高く、「オイデル」の敬意は高くない。同等の相手にも用いるが、だいたい目下に用いる。（表の△は、あまり用いられないという意味）

オクレル

男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
オクレ	オクレ	オクレル	オクレル	×	オクレ

（仮定の意では、「オクレタラ」を用いる）

「クダサル」の方が敬意が高く、「オクレル」の敬意は高くない。だいたい目下に用いる。「オクレヤス」の方が耳になじみやすく、「オクレル」はあまり用いないとのことである。

補助動詞としても用いる。

○　してオクレルか。

オ行キル形　　男女使用

四段活用動詞が上一段活用化したものに「オ」を冠する形である。

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
オイキ	オイキ	オイキル	オイキル	オ△イキレ	オイキ

（仮定の意では、「オイキタラ」が一般的）

この表現の敬意は高くない。だいたい目下に用いる。家人が使用人に少し丁寧に言う時や、親が子に言う時等に用いる。

○　はよう　オカエリんと、あかんえ。

サ行・ナ行変格活用動詞にも、同種の形が見られる。

○　オシル（「する」の意）

この表現は、近世後期上方語の流れを汲むものである。これについては、拙稿「近世後期上方語の待遇表現――動詞にかかわる上方特有の表現法――」（『橘女子大学研究紀要』第四号・一九七六年）の記述を、若干手を加えて以下に引用する。

この拙稿の全体は、第七部に収録している（「」『』等の符号については、一部変更している）。

「お行きる」「お言いる」のように四段動詞の上一段化形に「お」を冠した言い方は、上方に特有な待遇表現として注目されている。島田勇雄氏は「近世後期の上方語」（『国語と国文学』三六巻一〇号）で、次のように述べている。「…近世後期の後半になって現われた言い方であろう。この四段の上一段化（お行きる式）は、四段よりも敬意の深まる言い方であったらしいことは次の例で、相手に対しては上一段を、自分には四段を使っていることも分ろう。

おまへさんおかちたらわたしがたべるし、わたしが勝たら朔日の約束しておくれへ（文政五年　箱枕）

又、楳垣実氏は著書『京言葉』で、次のように述べている。「……同じく動詞の連用形に『た』が連る場合、動詞の前に『お』を冠せる用法も特徴がある。

……（用例略）……

この語法は江戸初期に始まつたらしいが、最初は『お』を附けなかつたのだが、江戸末期から他人に対して附けるやうになつた。現在では『お』を附けない用法は全くないが、この形から終止形が逆成されて、

あんたもおイキルか（あなたも行くの）

あんまりあわてゝおシルさかい…（餘りあわてゝするものだから…）

といつた形が出来てゐる。」同、「序ながら以上二例（註＝前記の例と禁止の例）の場合の『お』は、必ずしも丁寧な表現ではなく、極く親しい感情を含んだ表現である。後にも述べるやうに京言葉には相手に対する自分の地位や親疎の程度を暗に表現する種々の用法があつて、實に微妙な差異を現すことが出来るのであるが、この場合の『お』もその一種であり、『お行きやす』『お行きる』『お行き』『行き』と四段に使ひ分けられる表現のうちの一つなのである。」

島田氏は「お」のつく上一段化形にのみ敬意の表現として注目しているし、楳垣氏は「お行きる」「行きる」を各活用形をもつ上一段化形として捉えていない。しかし、実際には、「行く」「行きる」「お行きる」が各活用形にわたって、微妙に待遇的に使い分けられていたと考えられる。

「行きる」の活用形は、それぞれ、個々に例外的な現象として処理されてきたきらいがある。未然形について言うなら、「行きんか」という形は、楳垣氏の言う「連用形に否定の助動詞『ん』をつけて更に『か』『かい』『かいな』等の助詞を続ける」ものではなく、上一段化した未然形に「ん」「か」が付いたものである。「行かんか」「行きんか」「「お行きんか」の使い分けについては、前掲の拙稿（註＝「近世後期上方語の待遇表現――命令表現を中心に――」『国語国文』第四三巻三号・一九七四年）で述べた。連用形に関する島田氏の記述を次に引用する。「…右の連用形については、かって真下三郎氏が『京言葉の一時期』（『国語と国文学』昭和十三年十月号）で、「『お』を冠して『た』『て』に連なることが出来、この場合には音便の形を取らない。」と説明されたが、四段動詞で音便にならないと説明するよりも、上一段としての活用形がそろっていることなので、上一段になるために音便にならないのだと考える方が合理的であると思う。」とし筆者も、同意見である。次に命令形についてであるが、従来「連用形命令」として扱われてきた「行き」「お行き」を、上一段化した命令形で、四段の「行け」と並ぶものと考える。これらは、四段形と上一段化形との対応が待遇表現に非常に系統だって現われる事によって、傍証されうる。

近世上方語において、「行キル」形は活用が揃ったかたちで広く用いられている。命令形は「行キヨ」から「行キ（ー）」と変じたものであろう。

「オ行キル」形の終止形は、近世後期の後半の京都関係の資料にのみ見出される。「行キル」「オ行キル」共に、敬意のさほど高くない表現として、「行ク」と使い分けられていた。

以上、「オ行キル」形に関して述べた。

ナハル　男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
ナハラ…ナハロ	ナハッ…ナハリ	ナハル	ナハル	ナハレ△	ナハレ ナハイ

（仮定の意では、「ナハッタラ」が一般的）

「ナサル」の方が敬意が高く、「ナハル」の敬意は高くない。同等にも用いるが、だいたい目下に用いる。家人が、女中（おなこし）・下男などに対して用いる。

補助動詞としても用いる。

○　しナハル。

○　オいきナハル。

(2)　尊敬法助動詞による尊敬表現法

レル・ラレル

「レル・ラレル」は共通語と同形であるが、これについては、少し触れておく。

「レル・ラレル」は男女が目上に対して、よく用いる。接続の仕方について、注意すべき点を記す。

○　カ行変格活用動詞に接続する時

「来ラレル」「来ラレル」両形を用いる。

○　サ行変格活用動詞に接続する時

「しラレル」「さレル」両形を用いる。

ハル　男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
ハラ…ハロ	ハッ…ハリ	ハル	ハル	ハ△レ	×

（仮定の意では、「ハッタラ」が一般的）

敬意は高くない。同等に対して、あるいは目下に対して、丁寧に言う時に用いる。「ハル」はあまりきれいな言葉ではないという意識がある。

○　しハラへん。

○　してハル。

ヤス　男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
ヤサ ヤハ ……（ヤソ）	ヤシ	ヤス	ヤス	×	ヤス

（仮定の意では、「ヤシタラ」を用いる）

「ヤス」の敬意は高くない。同等以下に用いる。「オ…ヤス」の形の方がよく用いられ、こちらは比較的敬意が高く、同等あるいは目上に対して用いられる。命令は、「オ…ヤス」の形が一般的。

○　オいき（ヤサ／ヤハ）んとあきまへんで。

○　はよオいきヤス。

「ヤス」は「アリマス」の変化形であって、もともと尊敬の意味と丁寧の意味とを含む語と言える。近世前期上方語においては尊敬語として用いられ、近世中頃から後期にかけて、丁寧語としても用いられるようになる。近世の中頃以後上方語の影響を排する形で独自の性格を強めていった江戸語においては、「ヤス」は丁寧語の用法のみで、「マス」のように用いられた。このように、「ヤス」という語自体は上方語に特有のものではないが、これを尊敬語に用いる点に特色があり、現在の京言葉における「ヤス」は、これを受け継いでいると言える。

ヤハル　男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
ヤハラ…ヤハロ	ヤハツ…ヤハリ	ヤハル	ヤハル	×	ヤハレ△

（仮定の意では、「ヤハッタラ」を用いる）

敬意は高くない。「いヤハル」「みヤハル」「でヤハル」「きヤハル」のように、語幹が一音節の動詞に接続する。敬意の度合いは、「ハル」と同じである。

Ⅱ　いわゆる謙譲法に関する記述

(1)　謙譲法動詞による謙譲表現法

アガル（訪ねる）・アゲル・イタス・イタダク・ウカガウ・ウケタマワル・サシアゲル・ゾンズル・マイル・申ス・申シアゲル・その他

補助動詞として

…イタス・オ（ゴ）…イタス・オ（ゴ）…イタダク・…申ス・オ（ゴ）…申シアゲル・（テ）アゲル・（テ）イタダク・（テ）サシアゲル

サンジル　男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
サンジ	サンジ	サンジル	サンジル	サンジレ	×

（仮定の意では、「サンジタラ」が一般的）

「参上する」意。

補助動詞としても用いる。子供が朝、登校のため家を出る時のあいさつには、次のように用いた。

○　い（っ）てサンジます。

Ⅲ　丁寧法に関する記述

(1)　丁寧法動詞による丁寧表現法

ゴザイマス

補助動詞として

…ゴザイマス・(デ)ゴザイマス

オス　男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
オヘ	オシ	オス	オス	×	×

(仮定の意では、「オシタラ」を用いる)

「アル」の丁寧で、「アリマス」「ゴザイマス」と同意。「ゴザイマス」より丁寧の度合いが低い。聞き手が目上・同等・目下と幅広い。補助動詞としても、よく用いられる。

○ うれしオス。

○ みてもらいとース。

○ けったいにオスなー。

○ 京の名物やそうにオスえ。

(2)　丁寧法助動詞による丁寧表現法

デス・マス

「マス」は共通語と同形の語であるが、活用によって音訛形を用いるため、これについて少し述べる。

マス　男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
マショ マヒョ マホ …… マセ マヘ	マシ	マス	マス	×	×

（仮定の意では、「マシタラ」を用いる）

「ありマスヤロ」などの「マスヤロ」は、「マッシャロ」とも言う。

ドス　男女使用

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
×	ドシ	ドス	ドス	×	×

（仮定の意では、「ドシタラ」を用いる）

指定の表現である。聞き手が目上・同等・目下と幅広く、さほど丁寧な物言いではない。「ド」は、力を入れずに柔らかく言うのがよいとされる。「ドスヤロ」は、「ドッシャロ」とも言う。

○　どこドシたいな。

○　そうドスやろ。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと尊敬法・謙譲法・丁寧法の表現について見てきた。ここで、それらの表現の特色について考える。その上で、京言葉の待遇表現の特質に関する若干の試論を述べる。

その前に、今後京言葉の歴史的な流れを検討していく手がかりとして、近世後期上方語資料に現れた表現について

記述する。

筆者が使用した三〇余種の上方洒落本に現われた待遇の助動詞・補助動詞は、次の通りである（△は要確認の意）。資料名は後述する。今後は、『洒落本大成』（中央公論社）を資料として京都の洒落本に限った調査をしていく。

〈尊敬法〉

あそばす・おくれる・おじやる・くださる・お…くださる・くだんす・さしやる・しやる・さしやんす・しやんす・さんす・んす・たまふ・たも（目下に対して。他の活用形は用いない）・なさる・お…なさる・なさんす・なはる・なます・なる△・なんす・やしやる・やしやんす・やす・やる・やんす・らる・る・られる・れる

〈謙譲法〉

いたす・申す・お…申す

〈丁寧法〉

おます・ござります・ござる・ござんす・ごんす・でえす・ます

以上である。この他に、動詞に関わる軽い敬意の表現法を記しておく。第七部において詳述する。

イ、動詞連用形＋て＋断定　「指定」とせず、「断定」で統一する。

○ イ、エ　来てじや筈（はつ）であつたけれどナ（空言・中居→芸子）他の芸子のことを話題にしている。

ロ、（お）＋動詞連用形＋断定

○ わたしがかへさぬといふたら、どふしひじや（短・女郎→客）

ハ、四段動詞の上一段化形

これについては、Ⅰで述べた。

以上、近世後期上方語資料をもとに記した。

次に、ⅠⅡⅢで取りあげた表現の特色について考える。ⅠⅡⅢにおいては、まず、共通語と同形のものを▒内に列挙し、それとは別に方言形の一語一語に説明を付した。近世後期上方語資料に見られる表現を先に示したが、共通語と同形のものとして扱った表現の中に、近世後期上方語の流れを汲むものが多いことに気付く。それならばなぜ、共通語と同形のものとその他とを分離する記述の方法をとってきたのか。

共通語と同形のものは、おおむね、あらたまった物言いにおいて目上を対象として用いる表現である。それに対して、方言形として挙げたものは、総じて同等や目下に用いる敬意の高くない表現である。この両者の相違は、重要である。人々が京言葉に特徴的な表現であると捉える「ハル」「ナハル」「オ行キル」「ドス」「オス」等は皆、この敬意の高くない表現である。ゆえに、共通語では表しえない領域に多岐にわたる軽い敬意の表現を発達させているのが、京言葉の待遇表現の特質であると捉えたい。本稿で取りあげた表現に限らず、終助詞の多用や各種言い換えの発達も、この本質に関わるものと考えられる。

ではなぜ、言語感覚の敏感さの反映とも言えるこれらの表現が、京言葉において豊かであるのか。―被調査者の言によれば、社会であるいは家庭で人間の段階づけが非常に厳しく、その人間関係に対応する形で、言葉の躾が躾のうちでも重要な部分を占めていた。一人の人間として、その友人関係その言葉づかいに、親の厳しい注意が行き届いていた。その人間の階層に「つろくする（相応する）」友人関係や言葉づかいということが、大きな課題であった。目下に話す時にも、ふさわしい品位の保持が求められた。場の多様性に対応して、少しのニュアンスの違いで表現を使

い分ける言語感覚は、社会的に育まれたものと言えよう。

筆者は、次のような見通しを持っている。京都が歴史的におかれてきた位置が、先のような表現の発達に深い関わりを持っている。それゆえに、そのような表現の多用による、むき出しでない柔らかな表現が保たれてきたのである、と。

被調査者の一人が次のように言うのも、うなずけるところである。

人さんをそらさずに立てるのが、京都の人間どす。

Ⅳ　文末詞に関する記述

被調査者に向かって、「京言葉の特徴は何ですか？」と問うた。「はっきり言わないところ」「人様をそらさないで立てるところ」という答えが返ってきた。そして、それは文末の表現に負うところが大きいという点で、筆者と考えが一致した。

日常の会話における文末詞の種類はさして多くないが、その独特の音調に特色がある。その音調が、物言いを柔らかくしている。

〈発言内容を強めるはたらきをするもの〉

エ

女子を中心に使用する。男子もまれに使用。念を押す意味。

○　これ、わたしのエ。　　○　さっき、ゆーたエ。

この「エ」は文末の調子が下がるのに対して、疑問の「エ」では文末の調子が上がる。

ゼ

男女が使用するが、男子中心。「デ」と似たニュアンス。

○　あきまへんぜ。

ゾ　ゾー

男子が使用。ぞんざいな言い方とされる。

○　それ、おれのやゾ。

デ　デー

男子中心に用いる。農家の女子が用いることもある。ぞんざいな言い方とされる。

○　行ってくるデー。　○　するデー。

ワイ　ワイナ

「ワイ」は男子が使用。「ワイナ」は男女が使用する。

○　するワイ。　○　行くワイナ。

〈相手に語りかけるはたらきをするもの〉

オシ

女子が使用。次の世代では、「行きヨシ」となる。

○　行きオシ。

サ　サー

言わないわけではないが、あまり使用しなかった。

○　お行きーサ。

「行かんかいサ」は言わないとのことであった。

ナ　ナー

男女がよく使用する。命令の表現の文末等に付けて調子を和らげる。

○　お行きーナー。　○　お行きやすナー。

○　行きーナ。

ヤ

男女が使用。これも命令の表現の文末等に付けて調子を和らげる。

○　はよう、お帰りヤ。

〈感動・強調の意味をあらわすもの〉

ワ　ワー

男女が使用する。

○　そうやワ。　○　わたしのやワ。

○　きらいやワー。　○　かなんワー。

○　もう、行くワ。

〈疑問・念押しの意をあらわすもの〉

エ

男女が使用する。上がり調子になる。

○　おあんばい、どーどすエ。　○　どないしといやしたんどすエ。

カ

男女がよく使用する。

○　行かへんカ。　○　お行きやさしまへんカ。

カイナ

男女が使用。

○　これ、わたしのカイナ。　○　はよ、行かんカイナ。

ケ

男女が使用。町ではあまり使用せず、農家の人等が使用した。ぞんざいな言い方とされた。

○　行かへんケ。　○　行くケ。

ナ

男女が使用。相手の同意を求める言い方。

○　これ、わたしのやナ。

ノ　ノン

男女が使用。

○　お行きやすノ。　○　行くノン。

V　間投詞に関する記述

間投詞は、感動詞とも称される。

イヤ

女子の用語として、特徴がある。打ち消しの時は「イヤ」「インヤ」で、男女が使用。

○ イヤ、ほんまどすか。

コレ

「おい」よりも親しみのある呼び掛けに使用することがある。共通語の「これ」より柔らかな物言いである。

○ コレ、はよ、おしんか。

ハー **ヘー**

「ハーハー」「ヘーヘー」と重ねて言うこともある。「ヘーヘー」は、特に承知の意を表す。

○ ハー、そうや。

○ ヘー、そうどす。

○ ヘーヘー、さしてもらいます。

ここでは、間投助詞についても述べておく。種類が限られている。

ナ **ナー**

子供が親に言う時等に使用し、甘えているような印象になると言う。

○ あんナ（ー）、わたしナ（ー）、あそこにナ（ー）、行ったんやわ。

ネ **ネー**

「ネ」をよく使用して「あのネ（ー）」ばかり言う人のことをからかって、「アノネノカボチャ」と言った。「ネ」を

よく使用する人があったが、そういう人達は嫌いだったと被調査者は言う。そして、次のように付け加える。

「ナ」はよいが、「ネ」は、よそから来た言葉や。

○　あのネ（ー）、そしてネ（ー）　……。

ヘー　**ナーヘー**

○　あれはヘー、わたしのもんや。

○　あんナーヘー、わたしがナーヘー　……。

Ⅵ　格助詞に関する記述

ガ　**エ**　**オ**

普通「ガ」「エ」「オ」は言わない。しかし、あらたまった物言いではこれらもきちんと言い表される。

○　わたし　この本　持って　がっこ　行ってくるわ。

「エ」は「イ」となることもある。

○　どこイお行きやす。

ト

「ト」は、次に「いう」がくると融合形になることが多い。

○　なんチューても、知らんもんは知らん。

シカ

現在では若い層にあまり聞かれないが、次の用法がある。

比較の「より」の意で「シカ」を使用する。

○　これシカ、ええ。

Ⅶ　人称代名詞に関する記述

別に詳しく述べる（第一部第三章）。

Ⅷ　接辞に関する記述

接辞（接頭辞・接尾辞）のある語の表現効果に、注目する。京言葉においては、直接人を指し示す語以外にも色々な品詞の語に接頭辞「オ」接尾辞「サン」が付き、この形が多用されることが、一つの特色になっている。

○　オ豆サン　○　オやかまっサン〔喧〕　○　オまっとうサン〔待遠〕　○　オはやばや〔早々〕

次に人を指し示す語に付く接辞について記す。姓名に付く場合を示すので、主として接尾辞を扱う。

クン　〔君〕

男子が男子に対して。

○　中川君　○　ひろし君

コウ　〔公〕

同等か目下の者の名の下に付けて、親しみを表す。

○　健公

サマ　〔様〕

余程あらたまった場合にしか使用しない。「サン」と比較して、「サマ」が東京風の言い方だとする意識がある。

サン

姓に付ける形はごく一般的に用いられる。

○　中川サン

名に付ける形は、友人同士程度の親しい仲で。使用人女子に対しても。

○　菊サン

チャン

主に子供に対して。又、子供同士で。

○　まっチャン

ドン

名に付けて、使用人に対して用いた。使用人当人の本来の名に関わりなく、家によっては、使用人の呼び名が定まっていた。

○　菊ドン

○　すえきっトン

ハン

同等か目下に対して、姓・名に付けて使用する。目上の人に、面と向かって用いることはない。見下げた言い方として、同等の人間関係においてもこの形で呼ばれることを嫌う人がいる。

○　中川ハン

○　まさ子ハン

ヤ

「ヤン」の下略形と考えるが、呼びかけの「ヤ」と扱うべきか。

名に付けて、親しみを表す。

○　しずヤ

ヤン

「サン」よりは、くずれた言い方。男子の使用が中心。使用人同士が同輩を呼ぶ時等に。

○　常ヤン

以上である。その他の接辞に関してはそれぞれの別の項目において接辞が付いた形の語として取り扱うので、ここでは詳しく触れない。

Ⅸ　語えらびに関する記述

京言葉の待遇表現の質を考える場合は、言い回し選びと共に語選びが重要なポイントとなる。指摘できる点を挙げ、例を示す。

一、言葉に関して保守的傾向を持ち、新しく発生したものより古いものの方が丁寧な言い方であるという意識を、一般的に持っている。

（例）「見ラレル」を「見レル」と言うような人間は言葉づかいを知らないと、被調査者は、繰り返し嘆いた。

一、音訛形と元の形とを比較して、元の形が丁寧であるという意識を、語によって強く持っている。

（例）「サン」と「ハン」とに、明瞭な使い分け意識を持っている。「姓」に「ハン」を付けて呼ばれた被調査者は、不快感を隠さなかった。

一、概念内容がほぼ同じで待遇的にも差異が顕著でない二つ以上の語が、並び用いられていることがある。その場合、

話し手は自分なりの基準をもって言い分けている。その基準は、非常に個人的な場合とある程度通則的な場合とがある。そのいずれにせよ、京都人が語選びの基準を日常の話題にする頻度が高いことは、言葉に対する関心の度合いの高さを示すものと言えよう。

（例）「味噌汁」の意の「オムシノオシー」と「オムシノオツユ」とは、前者は家の者同士等の会話で用い、後者は客等に対して用いる。後者の方が上品な言い方であるという認識がある。

一、意味の上でも音の上でも、人当たりのよい言い方をするための語選びの努力がなされる。同じ意味内容を一語で言うのを避けて遠回しに言うこともある。語選びに関連して、口にしにくい語があるということである。女子は、漢語などの堅苦しい語や汚いと思われる内容の語を避ける。男女を問わず、相手をあからさまに傷つける語は口にしにくい。

（例）「アタタカイ」と「ヌクイ」の言い分け。「見ロ」「見ミ」の言い分け。又、「ワルイ」と「ヨーナイ」の言い分け。

一、特に女子にこの傾向が強いが、自らの物言いを上品にするために美化語を選ぶことが多い。

（例）「スモジ」「オカボ」「ウノハナ」等の御所言葉を、他地域の言葉に較べよく保存している。これらを上品な言葉とする意識がある。

一、性向語彙には、上品でない語が含まれる。これについては後に記す（第六部）。

X　言いまわしに関する記述

話し手の対人意識は、よくその言い回しに現れる。方言ごとに、待遇表現として、特有の言い回しが発達しているものと思われるが、京言葉の話し手の意識については、被調査者の言を借りて次に記す。

○　人様をそらさずにたてるのが、京都の人間どす。

○　京都の人間は万事うちらに（うちうちに・ひかえめに）物を言います。

このような意識のもとに京都においては、特に物言いが大切にされる。そのため、語から連文の段階に至るまで、間接表現がよく発達している。この特色は、近世後期の上方語と江戸語とを比較した場合に、上方語においてのみ顕著であった。これについては、第七部第一章に関連記述がある。

次のような場合には、直接的な表現が特に避けられる傾向にある。尚、どのような時に直接表現が避けられるかは、時代ごとに社会ごとに違いを見せる問題である。同一社会にあっても、位相的な異なりを指摘しうる。

○　相手についての批判・叱責等に言及する。

○　相手からの依頼・命令等に、断りの言及をする。

○　相手に対する依頼・命令・禁止等に言及する。

○　身体部位・病名・性癖等、社会的に直接表現が嫌われる話題に言及する。

日常的には、「あいさつ表現」の際の言い回しが、重視される。このことについては、別に述べる（第二部第一章）。

XI　呼びかけ・応答などの慣用の言いかたや、特殊のあいさつことばに関する記述

藤原氏は、呼びかけ用のセンテンス応答用のセンテンスには、待遇敬卑の効果が顕著に出て、したがってこれらが、さっそくに待遇表現法記述の対象とされると述べている。

このことについては、後考を期したい。

「あいさつことば」については、後に詳述する（第二部第一章）。ただし、具体的な考察の方法については、ここで述べておく。

京言葉における「あいさつ表現」の位置づけについて述べる。

筆者は、京都という土地柄において「あいさつ表現」が重視され育まれてきたという見通しをもっている。その見通しの妥当性を検討する立場から、先に、「あいさつ表現」について考えておく。

まず、「あいさつ」を「人と人の出会いの時・わかれの時に両者間に取り交わされる社会的にある程度定型化した言語表現や行動」と捉え、「あいさつ表現」をその際の言語表現と捉えておく。一般的にこう捉えたが、出会ってからの時間が経過している両者においても、新たな行動を一方又は両者が起こす時、社会の約束事によりその行動の前後において「あいさつ」がなされる。この際の「あいさつ表現」も、考察の対象とする。

「あいさつ」行動は動物にも見られる。二者間の出会いの場面で見られる動物の行動については、日高敏隆氏・新妻昭夫氏「挨拶―出会いの儀式化」（『言語』10巻4号・一九八一年）に記述がある。人間の「あいさつ」行動にも生得のものを指摘できる点については、藤崎康彦氏「あいさつの文化人類学」（『言語』10巻4号・既出）の記述を、次に引用する。

> 世界の諸民族のあいさつ行動を博物誌的に見てゆくと、非常な多様性の中にも共通性が認められることに気付く。何となく、社会的劣位者は物理的に低い姿勢をとるようだとか、食物等を与えるのは友好的な表現になるらしいとか感じている人は多いと思う。かような共通性に注目しているのが比較行動学的研究であると言える。
>
> 人類学者には、あいさつ行動だけを系統的に観察する動機付けは欠けていたのであるが、比較行動学者には論理的にその必然性がある。ヒト以外の動物においては、同種個体が出会う時何らかの結合の儀式を行うものが多い。従ってヒトの場合にも、進化の過程で系統発生的に獲得した適応的行動のパタンが儀式的なあいさつ行動として存在していると予想できる。

人間の「あいさつ」行動は、一方、社会的な約束事として当然社会ごとに違いを見せる。ある種の「あいさつ」行

動に「あいさつ表現」が伴うか否かも、社会ごとに違う。そのことを考慮する必要があるが、世界各言語の「あいさつ表現」に、似た部分と個別の部分との存在が考えられる。外国人の「あいさつ表現」については、石垣幸雄氏「あいさつの生態学」（『言語』10巻4号・既出）、奥津敬一郎氏・沼田善子氏「日・朝・中・英のあいさつ言葉」（『日本語学』4巻8号・一九八五年）等の記述がある。

日本語諸方言の「あいさつ表現」にも、似た部分と個別の部分との存在が考えられる。比較検討抜きに早計に京言葉の「あいさつ表現」の特色を云々できないのは、勿論のことである。

京言葉における「あいさつ表現」の記述にあたって、比嘉正範氏「あいさつの言語学」（『言語』10巻4号・既出）における検討のしかたを参考にして、具体的な方法を考えておく。尚、京言葉の用例をできるだけ多く示したいと考えている。そのため、例文のいちいちの共通語訳をせず、訳が必要と思われる語句については、後の〔　〕に共通語形を漢字又は平仮名で記すこととする。

まず、「あいさつ」の相手から考えていく。

あいさつの相手〈人間／擬人化できるもの〉

「あいさつ」の相手が、人間ではなく神や他の擬人化したもののことがある。幼児が神仏に手をあわせて「マンマンチャン　アン」と言ったり、野外で放尿する時に「メメズ〔蚯蚓〕モ　カイル〔蛙〕モ　ユルシテタモ」と唱えた

りするのは、その場合の「あいさつ表現」と考えられる。本稿では、「あいさつ」の相手を人間に限ることとする。

次に「あいさつ」が取り交わされる状況について考える。

あいさつの状況 ＜ 偶然の出会い / 意図的な出会い

先に、「あいさつ」を「人と人との出会いの時・別れの時に両者間に取り交わされる社会的にある程度定型化した言語表現や行動」と捉えた。その際の「出会い」には、偶然の出会いと意図的な出会いとがある。本稿で後述する他家への訪問の際の「あいさつ表現」は、意図的な出会いにおけるものである。意図的な出会いも、商用等の他の用事によるものと、病気見舞い・出産祝い等意図的な出会い自体が「あいさつ」になっているものとがある。偶然の出会いの時に述べられる病気見舞い・出産祝いの「あいさつ表現」とは異なり、意図的な出会いにおけるそれは、相当に定型化した形をとるものと思われる。定型化が更に強まった形の、冠婚葬祭における「あいさつ表現」については、後考にまわすこととする。尚、この意図的な出会いにおいては、出向く側迎える側の人物のそれぞれの家での位置づけが、その出会いの意図する「あいさつ」を格づけすることになる。

「あいさつ」のその他の面についても考える。

あいさつの相互性 ＜ 交互のやりとり / 一方的な言語行動

学校行事における校長の「あいさつ表現」等が一方的な言語行動にあたる。本稿で扱うのは、交互のやりとりを中心とした「あいさつ表現」である。

あいさつの表現手段 ＜ 言語 / 動作

「あいさつ」の表現手段については、勿論言語を中心に本稿で扱うが、ここで動作について少し述べておく。躾の厳しい町家においては、一般的に、子供の頃から茶道をたしなませた。又、女学校の「作法」の時間に取り入れられる等、小笠原流の作法が影響力を有した。茶道の作法、あるいはそれに小笠原流の作法の混淆したような作法が、所作として自然に身についていたという。「あいさつ」の動作について考える際に、考慮すべき事柄である。動作に関連して自宅で客の応対をする場合の行動について、後述内容との関連で述べておく。客に対して「ハシジカ〔端近〕ドスケド」と玄関先に座布団をすすめてそこで接待する場合と、「ムサクロシオスケド〔むさくるしいですが〕、ドーゾオアガリヤシトークレヤス」と座敷まで招じ入れる場合とでは、相手との親密さや相手の格づけが違う。又、部屋に通した客を送り出す際に、自分は部屋にいて家人・使用人に見送りを任せるか、玄関先・門口のどこまで自分で送って出るか、その行動の違いによって、相手の遇し方に差をつけるのである。

あいさつの言語 ＜ 話しことば / 書きことば

「あいさつ表現」として本稿で扱うのは、話しことばである。

あいさつの動作 ＜ 副言語的表現と身ぶり / 代用言語的身ぶりと表情

本稿では言語表現を中心に扱うので、問題になるのは副言語的表情と身ぶりであるが、特に具体的には取り上げないこととする。

あいさつの創造性 ＜ 適切な表現の生成 / 形式的な決まり文句の使用

「あいさつ」の場面が改まれば改まるほど、「あいさつ表現」が定型化して形式的な決まり文句が使用される傾向にある。日常の隣近所との物品のやりとりの場面においては、その物品のことを謙遜するという共通の発想のもとにも、贈り手側の「あいさつ表現」に幾通りかの表現形が見られ、表現の選択に融通性があることが分かる。

以上、具体的な考察の方法について考えてきた。一つの社会の「礼儀」に関わる発想と行動様式とが、大きく「あいさつ」のあり方を規定していることをふまえた上で、本稿においては、「あいさつ」の言語面である「あいさつ表現」を取り上げて、その特色を検討していく。

XII　特殊連文に関する記述

藤原氏は、「連文」を特に二文の連結したものを言うこととした。そして、その二文連結に一般的なものと特殊なものとがあり、方言の場合特殊な二文連接体が待遇表現上注目されるものとした。

例えば、応答の特殊連文は、それぞれに品位・位格を異にするという。又、叱ったりして、相手に強く切り込むような場合にも、特殊連文ができやすいと指摘している。

藤原氏の考えによれば、特殊連文は通常一般的表現の一文にも相当する。それゆえ、特殊連文は待遇表現法の見地からの注意にものぼりやすく、かつその処理も容易なのだという。

この項目については尚後考を期すこととするが、特徴的なものとして感動詞を含む二文を挙げることができる。

○　イヤ、ホンマ（カイナ）。

○　アンナー、ヘー。

右の表現は、女子の用語としての特徴のあるものと思われる。

○　ヘーヘー、サシテモライマス。

「ヘー」は、「ハイ」と共に広く返答において用いられるが、「ヘーヘー」は、それのみでも承知の意を示す丁寧な物言いである。これに「サシテモライマス」「ショーチシマシタ」等を続けると、承知の意を更に丁寧に述べたこととなる。

○　コレ、ハヨオイナイ。

「コレ」は、目下に対する呼び掛けに用いられる。命令・勧誘・禁止等の表現がこれに続くことが多い。親愛を含む表現である。

○　オーキニ、ハバカリサン。

次に、音声言語における音調は、待遇表現と深い関わりをもつ。従来、改まった場合に声の調子が高くなることなどが指摘されている。ここでは、項目をあげて概略を記すに留めておく。

XIII　文末の音声に関する記述

文表現における音の抑揚は、待遇表現と深い関わりをもっている。中でも文末の音声上の特徴は、待遇表現の表現効果と直接的につながる。京言葉においては、一般的に柔らかく言いおさめることが大切にされ、上げ調子の文末声調に特色があることが、指摘されている。

XIV　文表現面上の（文表現音声上の）特殊音調に関する記述

音調によって、話し手の感情のあり方が推測される。喜怒哀楽に応じて、音声上の特色が現われるからである。

又、話し手が文内容をどのように聞き手に対して伝えるか、その態度の違いが音調に現われる。高圧的な物言い、遠慮がちな物言い、哀願するような物言い、嘲笑するような物言い等である。親疎の度合いと関わって、硬質な改まった物言い柔らかな親しげな物言いの違いも現れる。

これらの音調上の特色は、即、待遇表現と関わる。類型を求めていくことが大切である。岐阜県出身の七〇代の某男子は、京都の年配女子の口調が一様に低いだみ声になるのに興味を感ずると、指摘している。「ドス」の音はきつく聞こえるので「ド」を柔らかく言うのがよいと、被調査者が言う。総じて柔らかい物言いを大切にする傾向がみられるが、その一環であろう。

XV　個々の表現音声に関する記述

藤原氏は、文表現面（文表現音声）上で特定の音声相が、特定の待遇効果を発揮することがあると指摘している。

XVI　卑罵・尊大など、「非ていねい表現法」に関する記述

目上・同等・目下の人間関係に対応して、「オイデニナル」「オイキヤス」「オイキル」等の表現が使い分けられる。その一方ここで扱う表現は、別に取り扱われるべきものである。感情的要素が加わって、卑罵・尊大の意味をもつ。当然、人称代名詞・文末詞・語選び等に分けて分析的に論じられるべきものである。

①　卑罵の動詞による卑罵表現法

サラス・ヌカス・クタバル・ホザク・ドツク

②　卑罵の助動詞による卑罵表現法

ヤガル

未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
ヤガラ…ヤガロ	ヤガッ	ヤガル	ヤガル	×	ヤガレ

男子使用　　（仮定の意では、「ヤガッタラ」を使用する）

○　い〔行〕っきャガッた。　　○　いきャガル。

クサル

未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
クサラ…クサロ	クサッ	クサル	クサル	×	クサレ

男子使用　（仮定の意では、「クサッタラ」を使用する）

○　しクサル。　○　い〔言〕いクサル。

ケツカル

未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
ケツカラ…ケツカロ	ケツカッ	ケツカル	ケツカル	×	ケツカレ

男子使用　（仮定の意では、「ケツカッタラ」を使用する）

③　卑罵の人称代名詞による卑罵表現

相手を面と向かって罵る人称代名詞として、次のものがある。

ウヌ　オノレ　オンドラ　オンドレ　キサマ　コノガキ　テメエ　ワレ

第三者を指し示す人称代名詞としては、次のものがある。

アノガキは連語。ここで取り上げておく。

アイツ　アノガキ

不定称としては、次のものがある。

ドイツ

④　その他の卑罵表現

相手のことを直接に罵るための表現には、次のようなものがある。

アホ　ドアホ

「馬鹿」の意である。「アホ（ヤナー）」は、親愛の気持ちをこめた軽い表現として使用されることもある。特に、軽くいなす言葉の「アホカイナ」は、多用される。これ等は、卑罵表現とはしない。

ボケ

「アホ」よりも、きつい言い方である。他にも否定的な意味合いの性向語彙を、罵り言葉として使用している。尚これについては、性向語彙を扱う際に触れたい。

⑤　慣用的な罵り文句

相手を卑罵するために、慣用として用いられた言い回しについて述べる。

次は、喧嘩等の際に特に女の子が口にした表現である。

○　ホッチッチ〔放っておいてくれ〕、カモテナヤ〔構ってくれるな〕、オマエノコジャナシ　オヤジャナシ。

「ドツク」は、拳骨で相手を殴ることであり、「シバク」は平手で相手を叩くことである。喧嘩においては、これを脅し文句として使用する物言いがある。男子が使用する。

○　ドツイタロカ。　　○　シバイタロカ。

第三章　京言葉における「人称代名詞」

はじめに

待遇表現における人称代名詞の位置と論の方向性について考えておく。

「人代名詞」と「人称代名詞」の呼称の違いについては、『近畿方言の総合的研究』（三省堂・一九六二年）P. 57で、楳垣実氏が次のように述べている。

「人代名詞」と「人称代名詞」とはよく混同されるが、区別したほうがよいとわたしは考えている。その理由はつぎのようだ。「人称代名詞」は英語などの Personal Pronoun の訳語で、「第一人称・第二人称」は「人代名詞」の「自称・対称」に呼応して問題はないが、「第三人称」は人間ばかりでなく、第一・第二人称以外のすべて、森羅万象を指示し得る代名詞で、he, she, it の it は、「人代名詞」の「他称」には含まれていない。その点が違う。「人代名詞」はいわば「人間代名詞」なので、物に使わないのが、原則だ。この違いは重要だとわたしは考えている。

筆者自身は、人間を指し示す場合に限って論を進める時にも、「人称代名詞」という一般的な用語を採用してきている。項目においては藤原氏にならって「人代名詞」としたが、他の拙稿と統一するために、「人称代名詞」という用語を用いることとしたい。

待遇表現を考えていく上で、人称代名詞に関して、次の二点に注目する。

①　人称代名詞は、基本形を定めにくい。

②　人称代名詞は、待遇表現と人間関係とを関連づけ整理しようという試みにおいて重要な意味を持つ。

②について。人間関係を中心に待遇表現を考える事は人間関係が捉えにくくて主観的になるとして、山崎久之氏は『国語待遇表現体系の研究』（武蔵野書院・一九六三年）において、語相互の対応―人称・待遇表現の共存―を中心とする考察方法を採って、成果を上げている。筆者は、語相互の対応と人間関係との両方を可能な限り考慮に入れる方向を、敢えて採ることとする。近世関係の拙稿において、試論を示した。資料として用いた洒落本が、遊里という限られた場を題材とした特殊なものであるために、人間関係にある程度の類型性を求めることができると考える。

そういう方向で論を進めていく際に、人称代名詞の持つ意味は大きいと考える。

ここでは、近世後期の上方語の人称代名詞のあり方をふまえた上で、京言葉の人称代名詞に関する調査結果を見ていくこととする。

㈠　京言葉における人称代名詞の特色

京都の町家の人々は人間関係に大きな配慮を払い多くのエネルギーを費やすという印象を、筆者は持っている。その配慮が多様な形をとって言語表現に現われるため、京言葉の特に待遇表現の質を明らかにしていくことは大変難しく又興味深い。人称代名詞のあり方を検討することによって、どれほどに、その配慮を問題とすることができるのだろうか。人称代名詞に関する限りにおいては、近世の使用資料において、上方語と江戸語とにきわだった質の違いを

指摘することはできなかった。それならば、どのような角度から、京言葉の人称代名詞の特色を見ていけばよいか。筆者は、次のように考えている。近世後期から明治大正以降へと変容していく京言葉の流れの中で、この明治生まれ話者の人称代名詞の使用を検討することによって、一つの特色を明らかにすることができるのではないだろうか。

この期の京言葉の人称代名詞の特色は、次節の内容を検討した結果明らかになったことであるが、記述が散漫になるのを慎れ、見るべき点の二・三について次に記す。

一、近世語には見られるが現在使用されていない語が、この期には、筆者の当初の予想以上に採取される。その際、位相に片寄りが見られ、特定の位相の語がのちに使用されなくなっていくことへとつながる。

一、男女共に、家庭内での使用語彙が、現在と較べよほど豊富であると言える。それは一つには、家庭内の人員構成の反映であろう。

家庭内の人員構成を見ると、舅姑・小舅・上下関係の厳しい複数の使用人等を抱えた大所帯の構成から、現在の小人数の構成へと大きな変動が見られ、それに伴って使用語彙も多様から単純へと変容したと言える。

一、家庭内での使用語彙の豊富さは、先に述べたように、一つには、家庭内の人員構成の反映と捉えることができる。しかし、同じ人間関係において複数の人称代名詞が使用されるということを考慮すると、それだけでは説明がつかないということが分かる。

それゆえ、いま一つ、言語感覚の敏感さの反映と捉えたい。

被調査者の言によれば、社会であるいは家庭で人間の段階づけが非常に厳しく、その人間関係に対応する形で、言葉の躾が、躾のうちでも重要な部分を占めていた（先述）。一人の人間として、その友人関係その言葉づかいに親の厳しい注意が行き届いていた。その人間の階層に「つろくする（相応する）」友人関係や言葉づかいというこ

とが、大きな課題であった。目下に話す時にも、ふさわしい品位の保持が求められた。場の多様性に対応して、少しのニュアンスの違いで幾つかの表現を使い分ける言語感覚は、社会的に育まれたものと言えよう。この点において、この期と現在とに多少のへだたりが認められる。

以上、この期の京言葉に関して、人称代名詞の用いられ方の特色について述べた。具体的に、人称代名詞の記述に移る。

(二)　京言葉における人称代名詞の記述

京都の町家において用いられた人称代名詞を、先に述べた調査の方法に基づいて収録した。この収録語彙を、以下に人称別話し手の男女別に表示していくこととする。

表示の仕方について、説明する。

(A)の類・(B)の類

被調査者に、自分が子供として育った家庭を頭に置いてもらい、家庭内で用いられる人称代名詞を収録した。採取の範囲は、(A)の類として、被調査者とその家族の者が日常の家庭生活において口にする人称代名詞を取り上げた。この場合、家族間の使用に場を限らずに、来客や使用人を聞き手とする場合も範囲に入れている。次に、(B)の類として、家庭外の日常の生活において被調査者が耳にした人称代名詞を、取り上げた。これは被調査者とその家族にとって理解語ではあっても使用語ではないものであって、位相上の片寄りが目に立つといってよいものである。

丁寧度

丁寧度の表示ＡＢＣは、次の基準のもとに、各語の丁寧度を被調査者に判定してもらったものである。

目上に用いるもの　……丁寧度Ａ
同等に用いるもの　……丁寧度Ｂ
目下に用いるもの　……丁寧度Ｃ

「ＡＢ」のように記す場合、「目上と同等に用いるもの」であることを示す。

備考

備考の欄には、筆者の主観を加えず被調査者の発言を記していったので、記述の基準に一貫性を欠く。

以上が、表示の仕方についての説明である。

次に、人称別に表を示す。

(1)　一人称（自称）代名詞

一人称（自称）代名詞　・話し手が男子

(A)の類	語	複数形	丁寧度	備考
	オイラ	単複同形	B C	子供の用語として。大人の用語としては、農家で。
	オレ	「ーラ」「ータチ」	B C	よく用いる。きたない語された。
	コチトラ	単複同形	B C	年配の人（先の代の人）が用いる。
	ジブン	「ーラ」「ータチ」「ードモ」	A B	第二次大戦後、軍隊用語の影響で用いられた。改まった際に用いる。
	テマエ	「ーラ」「ードモ」	A B	商人も一般の人も用いる。
	ボク	「ーラ」「タチ」	B C	子供も大人も用いるが、年配の人は用いない。
	メンメ	「ーラ」「ータチ」	B C	「おのおの」の意としても、一人称としても用いる。
	ワイ	「ーラ」	B C	よく用いるが使用が片寄る。子供によっては、用いていた。きたない語とされた。
	ワシ	「ーラ」「ータチ」	B C	よく用いる。きたない語とされた。
	ワタク	「ーラ」「ータチ」「ードモ」	A B	B段階では、改まった場合に。
	ワタシ	「ーラ」「ータチ」「ードモ」	A B	よく用いる。家によっては、家族内にも。
	アシ アッシ			商人・職人がよく用いる。

一人称（自称）代名詞　・話し手が女子

語	複数形	丁寧度	備考
（A）の類			
アタイ	「―ラ」「―タチ」	BC	主に子供が用いる。
アタシ	「―ラ」「―タチ」「―ドモ」	ABC	よく用いる。
アテ	「―ラ」	BC	子供はよく用いた。用いないように親から注意された。
ウチ	「―ラ」	BC	よく用いる。
コチ	「―ドモ」「―トラ」	BC	祖母等、先の代の人が用いた。
コチトラ	単複同形	BC	祖母等、先の代の人が用いた。女同士の会話等で。
メンメ	「―ラ」「―タチ」	ABC	「おのおの」の意としても、一人称としても用いる。
（B）の類			
ウラ			農家等で用いる。
オラ			主に子供の用語。あまり聞かない。
コチ			年配の人（先の代の人）が用いた。僧侶や公家等に、使用が限られる。
セツ			僧侶・俳人・茶人等が用いる。
セッシャ			インテリ層の用語。
ソレガシ			士族・知識階級の用語。
ワガハイ			書生等の用語。
ワッシ			商人・職人等の用語。

ワタイ	「―ラ」「―タチ」	BC	主に子供が用いる。
ワタクシ	「―ラ」「―タチ」「―ドモ」	A	あまり用いない。とても改まれば、用いる。
ワタシ	「―ラ」「―タチ」「―ドモ」	ABC	よく用いる。
（B）の類			
ワイ			農家の人が用いる。
ワテ			あまり用いないが、耳にすることはある。京都で「アテ」、大阪で「ワテ」が用いられるのだとする意識あり。

表で見る限りにおいて、以下に記す他の人称代名詞と較べ、一人称代名詞の位相の片寄りがきわだっていると言える。

(2)　二人称（対称）代名詞

二人称（対称）代名詞　・話し手が男子

語	複数形 ラ	複数形 タチ	複数形 ガタ	複数形 ドモ	丁寧度	備考
アナタ	△	○	○		AB	改まった時に用いる。
アナタサン	△	○	○		AB	よほど改まれば、用いる。
アンサン	○	○	○		BC	主に商人が用いる。
アンタ	○	○	○		BC	よく用いる。
アンタサン	○	○	○		BC	
アンタハン	○	○	○		BC	

(B)	（A）の　類															
	オウチ	オウチサン	オウッツアン	オタク	オタクサン	オヌシ	オノシ	オマイ	オマイサン	オマエ	オマエサン	オメー	キミ	ソチ	ソナタ	ソノホー
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○
														○	○	○
	BC	AB	AB	ABC	AB	C	C	C	C	C	C	C	BC	C	C	C
	商人も一般の人も用いる。	あまり用いない。			古風な家庭で用いる。	古風な家庭で用いる。用いたこともあった気がする程度。あまり用いない。	丁稚等の目下に用いる。				丁稚等の目下に用いる。	古風な家庭なら、明治の初め頃まで、親から子に用いた。	父から子に用いた。家庭外においては、校長先生が生徒に用いた。	父から子に用いた。家庭外においては、教師が男子生徒に用いた。	式典等で改まった場合に、教師が男子生徒に用いたりした。
キクン																

二人称（対称）代名詞　・話し手が女子

語	複数形 ラ	複数形 タチ	複数形 ガタ	複数形 ドモ	丁寧度	備考
アナタ	○	○	○		BC	
アナタサマ	○	○	○		AB	
アンサン	○	○	○		BC	
アンタ	○	○	○		BC	
アンタサン	○	○	○		AB	「ハン」のつく形の方がぞんざいな言い方。
アンタハン	○	○	○		BC	
オウチ	○	○	○		ABC	
オウチサン	○	○	○		AB	
オウッツアン	○	○	○		AB	
オタク	○	○	○		BC	
オタクサマ	○	○	○		A	
オタクサン	○	○	○		A	
オマイ	○	○	○	○	C	親から子等。
オマイサン	○	○	○	○	C	
オマエ	○	○	○	○	C	親から子等。

（A）の　類

オマエサン	○	○	○	○		C	
オマハン	○	○	○	○		C	親から子等。
コナタ	○	○	○			BC	
コナタサン	○	○	○			BC	
ソナタ	○	○	○	○		C	よく用いる。
ソナタサマ	○	○	○			B	
ソナタサン	○	○	○			C	

話し手が女子の場合の二人称代名詞に関して、もう一つの調査結果を示す。丁寧度を知る一つの目安として、二人称代名詞に対応する待遇の助動詞補助動詞等を調べた。調査の方法は、女子三人の被調査者が同席する場で調査者が二人称代名詞を口頭で示し、その語の後に続ける形で「行くか」の意の文を口頭で示してもらった。二巡同じ操作を繰り返し、ほぼ同様の答えが出てくることを確認した。前掲の表における丁寧度の表示を、ここでは参考のため（　）内に記す。

二人称代名詞	対応する表現（基本形「行クカ」）
オタクサン（A） オウチサン（AB） オウッァン（AB）	オコシヤスカ　　オイデニナリマスカ
アナタサマ（AB）	オイデニナリマスカ　　行カレマスカ

アンタサン（ＡＢ） アンタハン（ＢＣ）	オ行キヤスカ
オウチ（ＡＢＣ）	オ行キヤスカ　行カハルカ
オタク（ＢＣ）	オ行キヤスカ　行カハリマスカ　行カレマスカ
コナタサン（ＢＣ）	行カレマスカ
アナタ（ＢＣ）	行カレマスカ
アンタ（ＢＣ）	行カハルカ　オ行キルカ　行クカ
オマエサン（Ｃ） オマイサン（Ｃ）	オ行キルカ 行ク？
オマイ（Ｃ） オマエ（Ｃ）	オ行キルカ　行クカ　行ク？

(3)　三人称（他称）代名詞

三人称代名詞と次の不定称代名詞に関しては、話し手の男女の別による差が殆んど出なかったため、一まとまりにして示す。一部漢字を用いた。

丁寧度	語
（Ａ）	アノ（ソノ・コノ）オ人サマ／アノ（ソノ・コノ）オ方サマ 歴々　オ歴々

（AB）	アノ（ソノ・コノ）オ人サン／アノ（ソノ・コノ）オ方サン アノ（ソノ・コノ）方／アノ（ソノ・コノ）オ方 アノ（ソノ・コノ）オ人／アノ（ソノ・コノ）仁 アノ（ソノ・コノ）ゴ仁 アチラ（ソチラ・コチラ）サン／アチラ（ソチラ・コチラ）サマ
（B）	アノ（ソノ・コノ）人／アノ（ソノ・コノ）衆 アノ（ソノ・コノ）オ人ハン／アレ（ソノ・コノ）オ方ハン
（C）	アイツ（ソイツ・コイツ）／アレ（ソレ・コレ）／ヤツ

(4)　不定称代名詞

丁寧度	語
（AB）	ドナタサマ／ドチラサマ／ドナタサン／ドチラサン／ドチラノ方／イズレサマ
（B）	ドナタ／イズレサン
（BC）	ドナタハン／ドチラハン／ダレ／ダレサン／ドチラ
（C）	ドイツ

以上が、人称代名詞に関する表である。これらの表から読み取れることについては先に述べたが、次にまとめをしておきたい。

近世後期から明治大正以降へと変容していく京言葉の流れの中で、この被調査者における人称代名詞の使用を検討

することによって、一つの特色を明らかにできるのではないだろうか。この点について、考えをまとめておきたい。

調査結果による人称代名詞は、語数が多いという意味においてはむしろ近世の人称代名詞に近いと言える。実際に、近世語に見えるが現在は使用されていない人称代名詞が、先の表に幾つも見えている。それらの位相の片寄りを見せやがて姿を消していく人称代名詞は、おおむね知識層において用いられるものであると言える。京都の人間は言葉に関して保守的であるとよく言われるが、[註五]階層によって、その保守的傾向に差が見られる。一般に知識層の人間は、新しい知的な語を取り入れるのにもさといが、自らの品位の保持の手段として、言葉に対する保守的傾向を強く持つ。前の代にも用いられた語を、長く保存する。

明治大正昭和初期を中心とした京都において人間の段階分けが非常に厳しくなされていたことについては、既に述べた（第一部第一章・第三章）。その階層ごとに、使用語の移り変わりに時差が見られることは、注目に価する。その一方で、言葉のこの多様性を支えていた階層の別が曖昧化していく社会的変化が認められる。階層差の曖昧化に伴い、確かに言葉は変質してきている。人称代名詞も、数を少なくした。そのような変容の流れの中に位置づけると、京言葉の人称代名詞を、特徴的に捉えることができると考えるのである。

（註一）　近世後期上方語資料の位相的な片寄り

近世後期上方語の資料として現在残されているもののうち、口語資料として或程度数がまとまってあるのは、洒落本である。洒落本に描かれているのは、遊里関係の世界である。町人同士の会話なども見えるが、洒落本を資料として考察しうる言語は、遊里を中心とするものであるという限定を要する。第七部に関連する。

（註二）　「京言葉」と「優美」

楳垣実氏『京言葉』（高桐書院・一九四六年）の記述を引用する。

京都人、しかも京都の女は、特に保守的であるから、京言葉はいまだに江戸時代さながらの言葉を、かなりよく保存している。けれども、変遷はいつとなく行われて、やがては昔の優美さも失はれる時が来るだろう。（傍点は筆者）

（註三）　御所ことば
宮中・宮家・尼門跡、さらに旧公家に行われたことば。

（註四）　町家
被調査者の言によると、
西陣・花街（六花街―上七軒・祇園甲部・島原・先斗町・宮川町・祇園乙部）・御所・寺院は、町家と習慣も言葉も違う。（傍点は筆者）
という。「町家」は、「町の中にある家」「町方」等の意味で、用いておく。

（註五）　京都の人間の言葉に対する保守性
楳垣實氏『京言葉』（既出）から、「京言葉の特徴」について述べた一節を引用する。
また言葉に対して極めて保守的である。使ひ馴れた言葉をあくまでも守ってゆかうとする傾向が強い。

参考文献

楳垣実氏　『京言葉』（高桐書院・一九四六年）
楳垣実氏編　『近畿方言の総合的研究』（三省堂・一九六二年）
井ノ口有一氏・堀井令以知氏　『尼門跡の言語生活の調査研究』（風間書房・一九六五年）
井ノ口有一氏・堀井令以知氏　『京都語位相の調査研究』（東京堂出版・一九七二年）
真下五一氏　『京ことば集』（芸術生活社・一九七二年）
井ノ口有一氏・堀井令以知氏　『御所ことば』（東京堂出版・一九七四年）
井ノ口有一氏・堀井令以知氏　『京都語辞典』（東京堂出版・一九七五年）
井ノ口有一氏・堀井令以知氏　『分類京都語辞典』（東京堂出版・一九七九年）
中井幸比古氏　『京都府方言辞典』（和泉書院・二〇〇二年）
寿岳章子氏　『暮らしの京ことば』（朝日新聞社・一九七九年）
飯豊毅一氏・日野資純氏・佐藤亮一氏共編　『近畿地方の方言』（『講座方言学』七　図書刊行会・一九八二年）
木村恭造氏　『京ことばの生活』（教育出版センター・一九八三年）
江端義夫氏　「京都言葉の敬語法」（『国語研究』三の六・一九三五年六月）
藤原与一氏　「京都市下『中川郷』の敬語」（『近畿方言』一〇・一九五一年四月）

松本容子氏・渡辺柾子氏　「京都市における敬語の予備調査」（『やよい』三号・一九六六年三月）
小坂浩子氏　「京都府奥与謝郡伊根町方言の待遇表現について――常態の待遇表現法を中心に――」（『生活語研究』・一九六六年一一月）
小坂浩子氏　「京都府与謝郡伊根町方言の文末詞について」（『生活語研究』二・一九六七年六月）
井ノ口有一氏　「京都市室町商人・西陣機屋・祇園花街・賀茂農家における敬語行動の実態的調査研究」（『聖母女子短大研究紀要』三号・一九七〇年二月）
江端義夫氏　「京都の町ことばにおける方言文表現」（『国語教育研究』二五・一九七九年八月）